



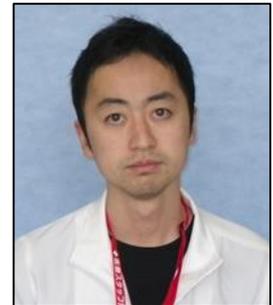
‘自治医科大学卒業生’として

公立みつぎ総合病院・内科 畑野 悠（広島県 32 期）

広島県 32 期卒業、現在医師 5 年目の畑野悠と申します。このような貴重な機会を与えていただき御礼申し上げます。まだ私は駆け出しの身であり、偉そうなことは言える立場ではないのですが、後輩に対してのメッセージということで以下の文章をお許しください。

本稿執筆のきっかけ

学生時代に *Journal of Epidemiology*¹⁾ に、今回 *Hiroshima Journal of Medical Science*²⁾ に論文がアクセプトされました。そのため、このような貴重なチャンスをいただき、執筆させていただきます。



論文を書き始めたきっかけ

学生時代から、本学循環器内科の苅尾七臣先生や消化器内科の山本博徳先生に憧れ、自分も何か研究をしたいという思いがありました。使うだけでなく、新しいエビデンスを自分で作りたいという気持ちが医師になってから、より強くなりました。

義務年限に僻地へ行けば研究を指導してくださる指導医がいないという恐れを学生時代から抱いていました。そのため学生時代にやっておくべき事を、①英語、②研究と決めて、色々な研究室や先生にお世話になりました。

その中でも自分の恩師である、現在広島大学医学部地域医療システム学講座准教授の松本正俊先生（当時、自治医科大学地域医療学部門）との出会いが、私の人生を変えてくれました。とにかくやる気だけあった大学 6 年生の私に、論文を書くチャンスを与えてくださいました。また、現在も地域包括ケアについて論文を書こうとしていますが、いつも相談にのっていただいているのは、恩師の松本先生です。信頼できる指導者がいるといたないのでは、論文に対する壁に圧倒的な差があるのを実感します。大学の医局に所属する医師達には、自動的に指導者がついてくれるものと思いますが、我々自治医科大学卒業生にとって研究の指導者を、自らの手で見つけておくということは、非常に大事なことなのだと思います。

学生時代にやっておくべきこと

義務年限で縛られている私たちは、先を見据えて動くことが必要かと思えます。できれば学生時代から、自分の将来像を持ち、学生時代にしかできない事を自分で考え、実行しておくべきだと思います。私の場合は、医者になったら田舎ではできないと思った事が、英語と研究だったため、大学 4 年生以降は海外留学に行ったり、色々な研究室にお世話になっていました。医療は座学では学べません。医療については研修医になってから勉強しようと思ひ、学生時代はそれよりも、大学という大きな場所にいないとできない事、時間がある学生時代にしかできない事を懸命にやらせていただきました。将来を見据え、今しかできない事を是非後輩の皆さんにも見定めていただければと思います。

研究に興味がある学生さんへのアドバイス

自分で研究できるレベルではまだないのですが、少しでもコメントさせていただきます。研究指導者を見つけること、学生時代から研究に少し関わっておくことができれば、より良いのかと思います。

義務年限を武器に

9 年間という専門医から遠ざかる義務年限をプラスに変えて、臨床や研究に活かしたいと思っています。専門医になるには、やはり義務年限はデメリットと言わざるを得ないでしょう。しかし、私が内科の中でも膠原病を目指していることもあるのですが、全身を見ることが出来る医師を育ててくれる僻地巡りは、自分にはメリットになると考えています。現在、症例数は決して多くないのですが、心臓カテーテル検査・治療、内視鏡検査・治療、内視鏡的逆行性膵胆管造影検査・治療、透析、一般内科、整形外科、関節リウマチ、訪問診療などを勉強させていただいています。これは臨床面だけでなく、研究方面にも活かせるであろうと思っています。広い視野を持って、多くの方面からアプローチす

る研究テーマを考えていくことができると思っています。

また、地域に密着しないとできない研究ができることも、義務年限のメリットだと思っています。それを実践されたのが苅尾先生だったと思います。私は今、地域包括ケアシステムを日本で初めて構築・実行した広島県の御調町という地域で働いています。そのため地域包括ケアをテーマとして、そこでしかできないテーマで研究を進めていきたいと思っています。

私の論文について

一つ目の論文は、学生時代に、JMS (Jichi Medical School) コホート研究のデータを用いて、アディポネクチン値と心筋梗塞の発症には明らかな相関がなかったことを、Journal of Epidemiology に掲載していただきました¹⁾。論文の大まかな書き方とJMS コホートという存在を知る事ができたことは大きな経験でした。また、この研究の際、本学教育センターの石川鎮清先生にも多くの事をご教授いただきました。私のような学生の意見にも耳を傾けていただいたことに強く感動したことを覚えています。

2つ目は、田舎ほど検診受診率が高いという内容の論文を、Hiroshima Journal of Medical Science にアクセプトしていただきました。これは、地域に関する他の変数を多重回帰分析で調節して、人口密度と検診受診率の相関を示しています²⁾。当初、選挙投票率をソーシャルキャピタル (SC) の代替変数として、SC と検診受診率の相関をテーマにしていたのですが、投票率がSC の代替変数として使われるには、まだその認知度は低く、証明が困難であるため、何度もリジェクトを繰り返しました。その後、テーマを若干変え、3年がかりでなんとかアクセプトしていただきました。この論文作成を通して、アクセプトされることの大変さ、リジェクトされた時の辛さ、英語のむずかしさなど、非常に多くの事を学びました。

ここまではテーマを指導医に決めていただき、研究に携わらせていただいていたので、今後は自分でテーマを決め、研究を進めていきたいと思っています。

最後に

決まり文句となってしまいますが、“僻地から世界へ発信する”をモットーに研究を進め、世界で戦える医師になりたいと思っています。今後もしようか皆様のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

- 1) Hatano Y, Matsumoto M, Ishikawa S, Kajii E. Plasma adiponectin level and myocardial infarction:the JMS Cohort Study. J Epidemiol. 2009;19(2):49-55.
- 2) Hatano Y, Matsumoto M, Inoue K, Takeuchi K. Rurality and Participation in Mass Preventive Health Services: A Nationwide Descriptive Study. Hiroshima Journal of Medical Science. 2013;62(3) :43-48.

!! 地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集 !!

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp

[発行] 自治医科大学大学院医学研究科

地域医療オープン・ラボ運営委員会

事務局 学事課大学院係 〒329-0498 栃木県下野市薬師寺 3311-1

TEL 0285-58-7477/FAX 0285-44-3625/e-mail openlabo@jichi.ac.jp

<http://www.jichi.ac.jp/graduate/index.htm>